

## 98 韓国スタディツアー

### ～ 国境を越えた共生を目指して～

民権協 郭辰雄

戦後五十年以上を経た現在もなお、韓日間には多くの問題が横たわり、真の和解と協力は形づくられていない。

しかしその一方で、韓日間のボーダレス化が進むなかで韓日両国の市民のレベルでは交流と協力の可能性が広がり始めている。

こうした韓日の市民の交流の拡大は、二十一世紀を視野に入れた韓日関係を築いていくためにも必要であると同時に、韓日の市民が平和、人権という普遍的価値に基づく協力関係を築いていくことは、北東アジアにおける平和の実現、人権の伸張に寄与することのできる関係を強めていくものとなるだろう。

民権協では、こうした問題意識のもと、八月十四日から十九日までの日程で、財団法人とよなか国際交流協会(以下協会)との共催で、「98 韓国スタディツアー ～ 国境を越えた共生を目指して～」(以下ツアー)を実施した。

このツアーは、市民交流と共同作業、現代韓国を理解する、歴史認識を深める、という三つの目的で企画し、この目的にもとずいて、北朝鮮食糧支援運動と南北統一、外国人労働者問題など多文化共生、日韓の歴史認識を学ぶための元「慰安婦」の人たちとの交流、を具体的なプログラムとして準備した。

### 期待と緊張のツアーのはじまり

八月十四日午後十一時、民権協と協会のスタッフをはじめツアーに参加する十九名(一人は韓国で合流)が関西国際空港に集合した。

私は韓国訪問は十回を越えるが、それでも今回は民権協として初めての韓国ツアーの主催、そして韓国の協力団体とのプログラムのコーディネートをするということもあり、これまでとは違う緊張を感じていた。

午後一時十分の飛行機に搭乗しソウルへと出発し、金浦空港へ到着後、地下鉄で宿舎の南大門市場のそばにあるREXホテルへと向かった。その日の夜は、食事をしながら交流をかねたオリエンテーションをおこない、ツアー中のタイムテーブルなどを確認した。

この場にはそれぞれプログラムに協力していただいている同胞助け合い運動の金允貞政策部長、外国人労働者対策協議会の朴チョヌン会長、李ユンジュ事務局長、

ハンシン大学の河棕文助教授、通訳の朴正任さんが参加してくれた。(それぞれの紹介は別掲載)

## 北朝鮮食糧支援と朝鮮半島統一を考える

翌十五日から本格的なツアープログラムが始まり、この日は同胞助け合い運動を訪問し、食糧支援運動の現状についてのレクチャーを受けた。

今回のツアーでこのテーマを入れた理由はさまざま挙げることができるが、まず何よりも、問題の深刻さからみて現在の韓国、朝鮮半島を語る際に決して目を背けることができないという点、そして歴史的にも関係が深く、国交もない日本と北朝鮮とのこれからの関係を考えるためにも重要な問題であるという点などから、プログラムとして企画した。

同胞助け合い運動本部では、まず北朝鮮の食糧危機の現状をまとめたビデオが上映され、それに続いて現在中国に滞在して北朝鮮への食糧支援活動の最前線で活動している金ヒョンドン対外協力局長から報告を受けた。

金氏は、「北朝鮮の食糧難は自然災害が原因のように言われているが、実は九二年から配給が減り始め、九四年にはほとんどの配給がなくなる状況になり、九六年夏頃から食糧『難民』が発生し始めた。これまでに少なくとも三百万人が死亡している」と語り、「昨年、募金活動などで市民運動団体がトウモロコシ十万吨を送った。今年は去年の成果を土台に五十万吨の食糧を送りたい」と述べた。

また韓国国内での状況について、「北朝鮮支援は九七年から本格化し始めたが、それまでは支援活動をするのが国家保安法違反となった。しかし金大中政権が誕生して対北政策も変わったので、だいぶ雰囲気は良くなっている」とし、これからも支援の取り組みを進めていきたいと語った。

続いて、徐京錫執行委員長があいさつにたった。その中で徐氏は、「私たちはいま北朝鮮支援活動を主に取り組んでいるが、発足の目的は海外に別れて住んでいる我が民族がそれぞれ助け合っていこうというもので、その他にも中国朝鮮族やロシアの高麗人なども視野に入れた相互扶助を考えている」と説明した。その上で、「食糧支援は今年に入って経済状況の悪化のために非常に困難になっている。そしてこれからは、北朝鮮が自立できるための支援が必要であり、これまでの無償の援助から有償のさまざまなプロジェクトを通じた援助への転換を図りたい」と説明した。

その後質疑応答が交わされ、参加者からは「食糧が住民に手渡るという透明性の問題は」、「土壌改良なども必要では」、「支援伝達の方法は」などさまざまな意見が出された。

昼食をかねた交流会の後、参加者はバスに乗り「八・一五統一祝典」が開催される臨津閣へと向かった。

今年の統一行事は、板門店で南北共同開催が基本的に合意されたが開催には

いたらなかった。しかし今回の「八・一五」をめぐって、七月に一九四五年の解放以後最大の規模の統一運動協議体である「民族の和解と平和統一のための大祝典」南側推進本部が六百七十余団体によって結成され、また政党・社会団体代表による民族和解協力汎国民協議会(民和協)が結成されるなど、南北の和解・統一に向けた新しい動きが見られたのも事実である。

祝典会場となった臨津閣には、約二千名の市民らが集まり、第一部では統一を願う祈念辞の朗読や、民和協結成の経過報告などが厳粛な雰囲気の中行われ、第二部では踊りなどの文化公演がおこなわれた。

会場を後にするときある婦人が、ツアーの参加者に、「貴方たちわかる？統一は政府がやることじゃないの。私たち民衆が力を合わせてやることなのよ」と何度も繰り返し語りかけていた。それを聞きながら、朝鮮半島の統一を語ろうとすると、こうした人たちの想いをどれほど受けとめているのかを自問せずにはおれなかった。

## ナヌムの家を訪れて

十六日は、午前中にハンシン大学の河棕文助教授と日本学科の学生たちと合流し、ソウル大学校内での討論会を持った。

今回のツアーでは、約二十名の学生たちが参加してくれ、ホームステイの受け入れや、自由時間での案内、また今回このツアーのプログラムのために韓日の関係について事前の学習会をおこなうなど、こちら側の期待をはるかに越える準備と心配りをしてくれ、参加者たちも言葉の壁はありつつも、実りの多い交流ができたのではないだろうか。

討論会では日本学科の学生たちから、「従軍慰安婦問題に対する考え」「日本文化開放をどう考えるか」「IMF時代をどう考えるか」「ワールドカップ共催をどう考えるか」という四つのテーマでの日本語での報告があり、その後全体での討論がおこなわれた。

プログラムの時間の関係上、十分な意見交換ができた訳ではないが、これからの韓日関係を担う学生たちとこうした場が持てたことは、双方にとって非常に貴重な体験となったのではないかと思う。

午後からは、学生たちとともに「ナヌムの家」を訪れた。到着すると講堂に招かれ、館長の慧眞僧侶からこれまでの「慰安婦」の方々の闘いと支援運動について話を伺った。慧眞僧侶は、「日本政府はまったく解決の姿勢を示していない。言葉だけでなく、責任者の処罰や実際的な措置をとらず、民間基金で解決しようとしている」とし、「私たちはハルモニたちの証言や私たちの闘いを通じ、この問題が過去の問題ではなく今の問題であると訴えていきたい」と物静かに、しかし確固として語った。

その後、私たちが歴史館の説明を受けていたときに金順徳ハルモニがこられて、急きょ野外での座談会となった。

金順徳ハルモニは、自分のこれまでの経験などを語りながら、「私はこれまで何度も日本に行ったし、必要があればまたいつでも行くつもりだ。もちろん日本政府は許せない、ちゃんと謝罪すべきだけど、政府とそこに住んでいる人たちは違う。日本の人たちのためにもこのことをちゃんと知って欲しいんだ」と、優しい口調で語りかけた。

## 「外国人労働者も人間だ」

十七日は、外国人労働者対策協議会にお願いして外国人労働者の支援活動をしている城南外国人労働者の家と安山外国人労働者相談所の二カ所にわかれてのフィールドワークをおこなった。

今韓国には、約二十三万人の外国人労働者のうち、約十三万四千人がオーバースティ状態にあり、九〇年代に入って急増している。そしてオーバースティ労働者は甚だしい人権侵害状態におかれている。こうした中で、九〇年代に入って各地で宗教関係、労働団体などが中心になって外国人労働者の支援活動に取り組まれている。

私の行った城南外国人労働者の家では、現在モンゴル、バングラディッシュ、モロッコ、ウガンダなどから来た労働者約七十名が共同生活を営んでいる。

主な活動は、労働相談(賃金未払い、労災、在留資格など)、医療相談、結婚・国籍相談などの相談活動や、韓国語講座、就職斡旋など幅広く活動している。

所長の金ヘソン氏は、「ほとんどの外国人労働者たちは日本でいう3K業種(きつい・汚い・危険)に従事しており、人権侵害が後を絶たない。そして韓国政府は『外国人労働者は人間ではなく労働力』としか見ない。私たちはそうではなく『外国人も人間だ』という立場で支援活動をしている」とし、「ただこの問題を本当に解決しようとするれば、法や制度だけでなく私たちの意識も変わっていかないとだめだが、まだまだ私たちの中には外国人に対する差別的な意識が根強い」と語った。

そして「韓国の外国人政策は日本のまねをしているので、外国人の人権向上のために韓日の経験の交流が今後必要だ」と強調した。

今回のツアーで、私もはじめて外国人労働者の家を訪問したが、世界的にボーダレス化が進み、貧しい国から富める国への人口移動が急増している今、外国人労働者問題をはじめ、韓国社会が「内なる国際化」をどう考えていくのか、大きな課題になってくるだろう。

## ツアーを終えて

私は今回のツアーを企画するにあたって、念頭においたのは、単に「韓国を知る」ためだけのものではなく、「人と出会う」ことであった。

すでに韓国への旅行は国内旅行なみの手軽さになり、韓国に関する情報も氾濫している中で、このツアーの意味は、今の自分たちの社会に問題意識を持って、変える

ために努力している人たちと出会い、語り合い、そこで得た観点や発想から韓国社会をとらえ、あるいは日本社会をとらえ返す、そんな出会いをつくるためのものだったと思う。

その意味で、協力してくれた韓国の人たちとの「出会い」は非常に有意義であり、また参加した人たちそれぞれとの「出会い」が貴重な財産となった。

しかし「出会い」はあくまで第一歩に過ぎない。「出会い」を今後どのように深めていけるのか、これが大きな課題である。